

# 郷土資料 あれこれ 68

【問合せ】  
社会教育課郷土史編さん係  
☎773-2197

夏を迎えると市内各地で、神社の祭礼や地区ごとの夏祭りに開催される「南魚沼市兼続公まつり」の経緯とこれにまつわる石碑などについて紹介します。

六日町上町の八坂神社の祭礼（神輿渡御）と同境内にある金毘羅宮の祭礼（川舟の運航安全祈願）は、古くから行われていました。

昭和32年に温泉が湧出し、温泉旅館組合が設立されると、温泉まつりも行われるようになり、また、商工業が発展し、商工会主催の商工祭りも催されるようになり、昭和34年には、これらのまつりを統合して、六日町まつりとなり、現在の「南魚沼市兼続公まつり」にたっています。

を飾る催しの一つが「お六流し」です。若き日の直江兼続（幼名は樋口与六、お六は愛称）と上杉景勝の妹といわれる桂姫をうたった「お六甚句」に合わせて約1時間半踊り続ける踊り行列です。

「お六流し」は、昭和20年代の後半に、歌謡山脈社白バラ団（長谷川洋主宰）と商工会役員が花まつりの仮装行列に参加したことに始まるといえます。

平成28年の「お六流し」には、約1,000人が参加したそうです（平成29年は豪雨のため中止）。毎年、参加を楽しみにしている人も多くいます。

昭和20年、今成幸一六日町長より上杉景勝・直江兼続両武将の誕生を後世に伝え、町おこしの宣伝を考えることを六日町文化連盟に依頼しました。依頼を受けた六日町文化連盟は、町を宣伝するための歌の作成を決め、昭和21年に「お六甚句」が誕生しました。作詞は、同連盟の山田親一、桑原博を中心にメンバーが協力し合い、何度も推敲を繰り返しながら作り上げられ

ていったそうです。作曲は嶋田国吉、振り付けは田辺万次郎でした。昭和32年、温泉湧出による町おこしの一つとして、お六甚句がレコード化され、新たな振り付けが行われました。翌年には、「週刊サンケイ」の全国民謡人気投票で9位となるなど人気が高まり、「お六流し」も盛んになっていきました。（写真1）



写真1 お六流し（昭和34年）

作詞が行われた当時を伝える逸話として、六日町文化連盟のメンバーであった山崎新一家には、「桑原博さんが頻りに家を訪問し（新一と一緒に）、お六甚句を作詞した」との話が残されています。また、人気投票に入賞したことを受けて「作詞者として私は心から喜びを感じた」と新一自身が家記録に残しています。

「送りましようか／送られましようか／寺が鼻まで時雨にぬれて」とはじまるお六甚句の石碑は、所縁の地である坂戸山登山道の寺ヶ鼻コースの入り口にあります。（石碑⑤）



南魚沼市の石碑⑤  
〔東泉田〕

また、六日町大橋脇のお六の湯の前に、平成22年にお六と桂姫の二人の銅像が建立されました。この銅像からは、お六甚句のボソノバ（ブラジル音楽の一つ）パフォーマンスを聞くことができます。（石碑⑥）



南魚沼市の石碑⑥（銅像）  
〔お六と桂姫像〕 〔六日町〕

《参考資料》  
『六日町史』通史編第三巻  
『直江兼続を偲ぶ』

『みなみうおぬま』第十五号販売中

【問合せ】  
社会教育課郷土史編さん係  
☎773-2197

「みなみうおぬま」第十五号を販売しています。内容は、資料紹介（上越鉄道敷設運動）、山間農業と「マブ」、田邊忠太郎と日清・日露戦争、南魚沼地域における青年会の創設と展開などです。

販売価格 1000円  
販売窓口 郷土史編さん係、大和・中央・塩沢公民館



※『みなみうおぬま』は、第十五号を持ちまして終了となりました。長い間、ご愛読いただきありがとうございました。